

2. 海外登山の実践と今後の課題

ナムチャバルワ峰日本・中国合同登山

——地球に残された最高の未踏峰——

重 廣 恒 夫

ナムチャバルワ峰(7782m)はヒマラヤ山脈東端の北緯29度37分51秒、東経95度3分31秒に位置する。ヒマラヤ山脈の北側を西から東へほぼ真横に流れているのがヤルツェンポーであり、ナムチャバルワを囲むように弧を描き、やがてブラマプトラ河となってベンガル湾に注ぐ、ヤルツェンポーの河岸から原生林を経て4600mもそそり立つこの峰は頂上から右のナイプン峰と、左の西北西稜が広がり、今にも飛び立たんとする大鷲を思わせる。

チベット語の「ナムチャバルワ」は、「天から落ちて来た石ころの集り」の意で現地のチベット族の間では、今でもこの山に関する興味深い神話や伝説が伝わっている。ナムチャバルワ峰は未踏のピークであり、その地形が複雑で気象が特異で、動・植物の種類が豊富なことから、内外の登山家や科学者の関心を集めている。

ナムチャバルワ地区の気候状態は、チベットの西部地区とはかなり異なっている。この地区はヒマラヤ山脈と横断山脈の接合地帯にあたり、このため、インド洋の湿った空気がヤルツェンポー河の渓谷沿いに北上し、ナムチャバルワ地区に流入し、この地区の気候を温暖・湿潤で雨や雪の多いものになっている。5月から始まる雨季は、9月末まで続き時には10月まで長びくこともある。7、8、9の3ヶ月間は降水量の最も多い時期で、ほとんど毎日雨が雪が降り、しかも雲が厚くナムチャバルワ峰の姿はほとんど見る事ができない。

登攀史

1910年、20年、40年の3度にわたり、英国登山隊が英領インドから接近したがいずれの場合も気象条件が悪く、アプローチルートも見い出せなかった。

1960年12月、チベット登山隊により、周辺調査が行われ、同隊はヤルツェンポー屈曲部の加拉^{ガラ}まで入り、南稜を5000mまで試登した。

1982年3月下旬から5月中旬にかけて、中国登山協会隊が南稜、東北東稜、西北西稜、西壁にルートを探り、南稜上那木拉^{ナムラ}峠に到達。同年7月から10月、中国科学院により学術調査隊員28名、登山隊員16名からなる調査隊が派遣された。

1983年3月から4月、西北西稜及び前衛ナイプン峰の西稜と南稜を試登し、4月21日、仁青平措^{インツァンペンツェ}、栄志義ら7名が登頂した。同年6月から9月にかけて、第三次大規模学術調査として、学術隊員など50人の関係者が派遣された。

1984年3月から5月にかけて、中国ナムチャバルワ登山隊を派遣するが、主峰に至る南稜上部への下降ルートが見い出せず登頂を断念した。

1990年の日中合同偵察

1990年暑い夏の盛り、中華人民共和国・国家体育運動委員からナムチャバルワ峰登山の特別許可が日本山岳会におりた。思えば長い道のりであった。日本山岳会が初めてチベット側のチョモランマ峰遠征を実施して以来、10年目に受け取った吉報であった。10月11日には北京にて中国登山協会とナムチャバルワ峰偵察の打ち合わせが行われた。あわただしい準備の後、11月11日、ラサに日中双方10名の隊員が集結した。17日から23日にかけて西北西稜の支尾根の試登を行ったが、いずれも取付く氷河の状態の悪さ、岩の脆さ、そして上部の懸垂氷河の崩落により多発する雪崩のため危険性が大きいと判断、ナイプン峰ルートへと転進した。

12月4日ベースキャンプを出発し、7日にはラバロを突破し、9日に5600mにC3を建設、11日、いくつかのクレバスを避けてルートを延ばし、6900mのナイプン峰直下の氷の割れ目にナムチャバルワ峰最低コルへの下降ルートを探す事ができた。短期間での偵察行動であったが、ナムチャバルワ峰の概略をつかむ事ができた。

ナムチャバルワ峰は、東北東稜、西北西稜、南稜の3つの長大な尾根の頂点に位置し、いずれも末端は大きな絶壁となっている。それぞれの稜線に喰い込むルンゼや支尾根は急峻で雪崩の危険性が大きく、アルパインスタイル的な単独や小人数のスピード登山でないと、これを突破する事は難しい。しかも、いずれの稜線に到達しても雪質が悪く、苛酷なラッセルが待ち受けている。したがって比較的キャンプサイトの求め易い南稜のルートが登頂の可能性が最も大きいと考えられた。最低コルへの降り口から主峰を眺めた限りでは、45度から60度程の傾斜の岩稜とその右側に氷雪壁が拡がり、7400mから100m位の岩壁部分の一番細い部分がルートとしてとれそうである。途中でテントサイトを求める事は不可能だと思われるので最低コルから、標高差1000mを一気に登り切る技術と体力が要求される。

山容、ルートの的にはカラコルムのマッシュャーブルムの北西壁に酷似している。又、秋というシーズンは低温と強風が本隊の登山を大きく左右するだろうという事が予想できた。

計画と実際

ナムチャバルワ峰の初登頂を成功させる為には人と物が必要である。すなわち適正な人員で適正な物資を最も経済的かつ効果的に配する事である。今回も1989年の日本、中国、ネパールのチョモランマ3国友好登山と同様に日本側がタクティクスを立案、現場においては最前線で指揮をとる事になった。

1. 登山ルート ナイプン峰経由の南稜
2. 登山時期 9月下旬～11月下旬
3. 登山方法 無酸素、極地法とアルパインスタイルの併用
4. 登山隊員 日本、中国各6名

2. 海外登山の実践と今後の課題

日中双方が協力して成功という2文字を獲得するための計画は、キャンプサイトの確保、物資の荷上げ、補給とそれらの管理等の機能の充実を図らなければならない。またこのことが成功の必須条件であり、過去の記録、情報を収集、分析し、以下の基本的な計画を立案した。

1991年日本、中国ナムチャバルワ合同登山隊概要

1) 登山隊の目的

- (1) 世界最高の未踏峰、ナムチャバルワ峰の初登頂
- (2) 日中協力による友好の熟成と登山技術の研鑽

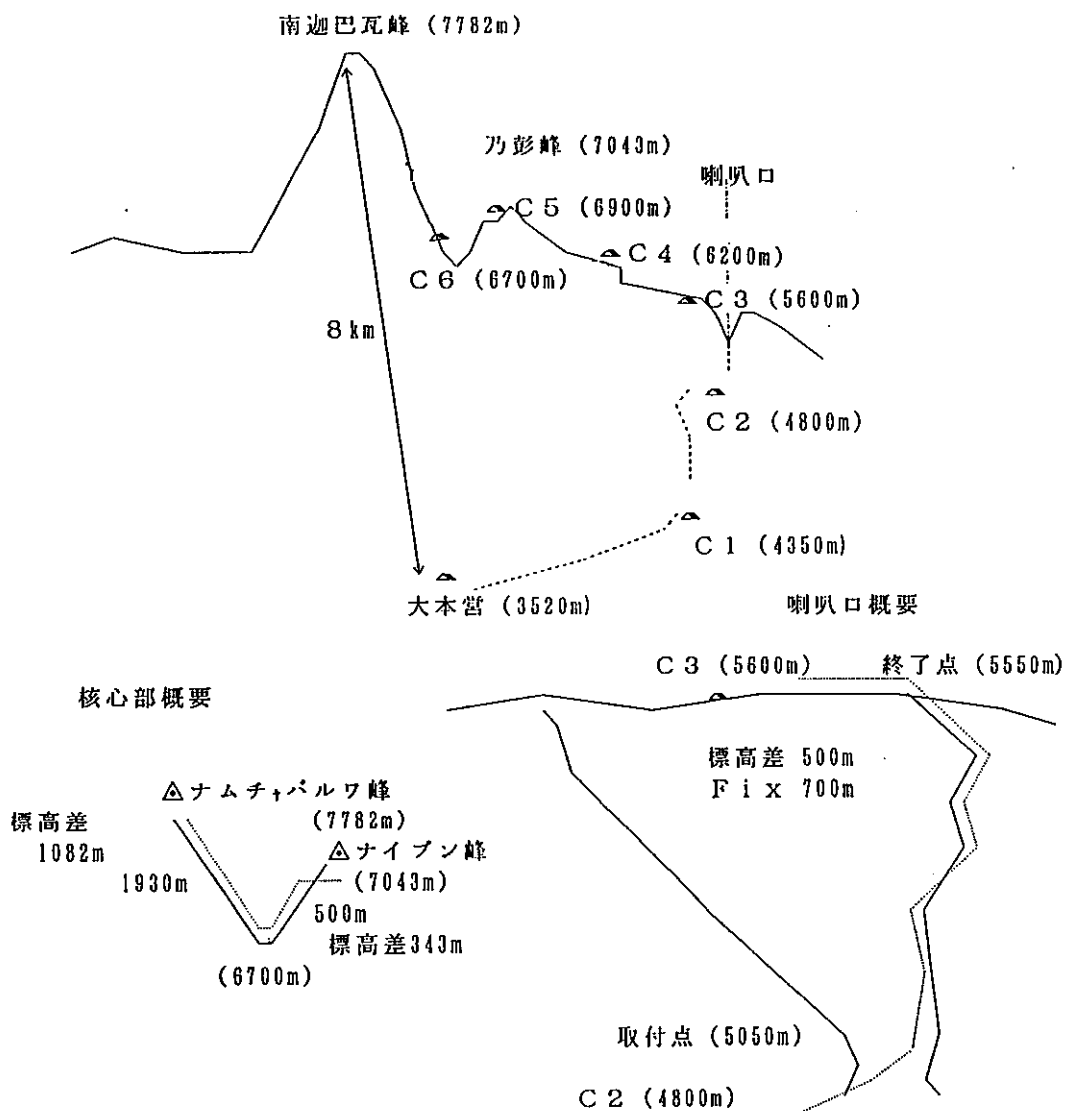
2) 登山計画

- (1) 登山ルート ナイブン峰經由の南稜ルート
- (2) 登山時期 1991年9月29日～11月30日
- (3) 登山方法 無酸素 極地法

3) 隊の構成

	日本	中国	読売	NHK	合計
総隊長	1	1			2
副総隊長	1	1			2
隊長	1	1			2
登攀隊長	1	1			2
隊員	4	4			8
マネージャー	1(兼通訳)	1	1	1	4
医師	1				1
通訳		1	2(中国)	1(中国)	4
連絡官			1(中国)		1
炊事員		3			3
運転手		2			2
高所協力員			6(中国)	5(中国)	11
低所協力員					
報道人員		3	6		9
テレビ人員				4	4
無線技師		1			1
合計	8	17	16(9)	11(6)	56

キャンプ地 概念図



2. 海外登山の実践と今後の課題

行動予定

長期的な計画として以下の3期の目標を設定した。これとは別に気象の動き、隊員の体調等に合わせ、効率良く行動できるように中・短期の予定を現地で作成した。

第一期、B・C～A・B・C建設、ラパロのルート工作、C3への荷上げ。

第二期、C3建設、C4・C5へのルート工作、キャンプ建設、荷上げ。

第三期、C5建設、C6へのルート工作、荷上げ、建設、登頂。

装備、その他

登山隊員用として4人用10張、6人用16張及びツェルト2張のゴアテックステント及びスタッフ、ベースキャンプ用として4人用4張、オーナーロッジ2張、中国テント3張を用意した。登攀装備では、登攀用ザイル50m10本、フィックス用ロープ2500m、スノーバー40本、各種ハーケン85本を用意した。炊事具ではC1以上ではガスを使用する事とし、36台のバーナーと30台のガスランタンを用意した。

通信機器では、144メガヘルツの小型無線機を各隊員が持ち、BCとC2には50Wのモバイル機を用意し、BCとラサの通信を確保する為100Wの短波無線機を用意した。

2. 海外登山の実践と今後の課題

ナムチャバルワ峰天気・日誌

		BC	C1	C2	C3	C4	C5	C6	日 誌
		3520M	4350M	4800M	5600M	6200M	6900M	700M	
1	9/28	①							八一嶺⇒BC
2	/29	①							BC整理
3	/30	①							BC整理
4	10/1	①							BC開き
5	/2	①	①						登山活動開始 C1建設 一次隊C1入
6	/3	①	①	①	⊙				C2建設 一次隊C2入
7	/4	⊙	●	●					二次隊C1入 一次隊BCへ下山
8	/5	⊙	●	⊗	⊙				二次隊C2入
9	/6	⊙	①						一次隊C1入
10	/7	●	①						一次隊C2入
11	/8	⊙	⊙	●					ラバクのルート工作 5600mへ 二次隊C1入
12	/9	⊙	①						一次隊C3予定地に荷上げ、二次隊C2へ荷上げ
13	/10	⊙	①	⊙	①	⊙			二次隊C2入
14	/11	⊙	①	⊙	①	⊙			二次隊C3荷上げ
15	/12	①	①	①					一次隊C3荷上げ
16	/13	①	○	⊙	○	⊙	⊙	⊙	C3建設 一次隊C3入
17	/14	●	●	⊗	⊗				C3 C2 悪天候で停滞
18	/15	●	①	●	①	⊗	○	⊗	C3 C2 悪天候で停滞
19	/16	○	①	○	①	○	①	①	大西宏隊員C4予定地付近で雪崩に会い遭難
20	/17	①	①	①	①	⊙			大西隊員をC3に収容

2. 海外登山の実践と今後の課題

ナムチャバルワ峰天気・日誌

		BC	C1	C2	C3	C4	C5	C6	日 誌
		3520M	4350M	4800M	5600M	6200M	6900M	700M	
21	10 / 18	①	①	①	①	①	①		大西隊員をC2に収容 全隊員C2へ集結 山田会長BC入
22	/19	◎	◎	◎	①				日中の隊長、登山隊長BCへ下山
23	/20	◎	①	①					登山隊全員BCに集結
24	/21	◎							BCにて休養
25	/22	◎	①						BCにて休養
26	/23	◎							BCにて休養
27	/24	◎							BCにて休養
28	/25	◎	◎		◎				高見、木本、山本隊員C2入
29	/26	◎	◎						C1近くの河原で大西隊員の仮葬儀
30	/27	◎		◎	◎	◎			登山再開C2入
31	/28	①		◎	◎				C2にて整理
32	/29	○		○	○	◎			C3入
33	/30	○	①	○	○	①	○		C4予定地へ荷上げ
34	/31	◎	○	◎	◎	○			C4予定地へ荷上げ
35	11 / 1	○		①	○	①			C3にて休養
36	/2	◎		◎	○	◎			C4荷上げ C4建設(テント1張のみ)
37	/3			◎	◎	◎	◎		高見、山本C4入
38	/4	①		◎	◎	◎			高見、山本降雪のためC3へ下山
39	/5			◎	◎				一次隊C4入
40	/6	①		◎	◎	①			C4 C3とも降雪のため停滞

2. 海外登山の実践と今後の課題

ナムチャバルワ峰天気・日誌

		BC	C1	C2	C3	C4	C5	C6	日 誌
		3520M	350M	800M	5600M	6200M	6900M	6700M	
41	11 /7			○	○				C5予定地に荷上げ後、コル偵察 二次隊はC3滞在
42	/8			○	○	○			一次隊C5荷上げ後、C2へ下山 二次隊C4入
43	/9			○	○	○	○		二次隊C5荷上げ後、C2へ下山 登山隊C2集結
44	/10			○					C2にて休養
45	/11			○					C2にて休養 アタックメンバー発表
46	/12			① ⊗					第一次アタック隊C2出発 C3入
47	/13			○	○				第二次アタック隊C2出発 第一次アタック隊C2出発 第一次隊C4入
48	/14			⊙ ⊙	○	○			強風のためC4、C3とも停滞
49	/15			○		○	○		C5建設 第一次隊C5入 第二次隊はC4入
50	/16			①		○	○		第一次隊日中4名でC6偵察 第二次隊はC5 入り目前、強風でC4へ戻る
51	/17	○		○		○			強風のためC5、C4とも停滞
52	/18			○		○	○		第一次隊日中4名でC6ルート工作 第二次隊はC5入
53	/19			⊙ ⊗			○	○	C6建設 7200mまでルート工作 第一次隊C6入
54	/20			⊙ ⊗			⊙ ⊗		第一次アタック隊 C6から頂上を目指すも 悪天候のため7350mで引き返す
55	21 /18			⊗			⊗ ⊙		C6 C5とも停滞
56	/22			○			○		再アタック、7460mで流雪、雪崩のため登頂断念
57	/23			○			○		C6 C5とも停滞
58	/24			○			○ ○ ○		三度目のアタックは、上部の予定ルートが危険 性高く、中止。登山中止決定
59	/25			○	○	○	○	○	第一次隊C6を撤収し、C3へ 第二次隊C2へ下山
60	/26			①					第一次隊C4、C3撤収後C2へ下山 重廣隊長はBCへ下山

2. 海外登山の実践と今後の課題

ナムチャバルワ峰行動表(1)

		3520m BC	4350m C1	4800m C2	5600m C3	6200m C4	6900m C5	6700m C6
1	9/28	BC入り						
2	29	BC整理 装備支給						
3	30	BC整理 装備支給						
4	10/1	BC閉鎖						
5	2	C建設		T.K.O C.J.P				
6	3	C建設 S.T.L		T.K.O C.J.P				
7	4	T.K.O C.J.P		S.Y.H S.T.L				
8	5	T.K.O C.J.P		S.Y.H S.T.L				
9	6	S.Y.H S.T.L		T.K.O C.J.P				
10	7			T.K.O C.J.P				
11	8	テロ ル+工作		S.Y.H T.K.O S.T.L C.J.P				
12	9		S.Y.H	T.K.O S.T.L C.J.P				
13	10	J		S.Y.H T.K.O C.P.S.T.L				
14	11		S.Y.H	T.K.O S.T.L C.P.R				
15	12			S.Y.H C.P.R S.T.L				
16	13	C3建設		S.Y.H S.T.L	T.K.O C.P.R			
17	14			S.Y.H S.T.L	T.K.O C.P.R			
18	15			S.Y.H S.T.L	T.K.O C.P.R			
19	16	大西隊員 遭難		S.Y.H S.T.L	T.K.O C.P.R			
20	17			S.Y.H S.T.L	T.K.O C.P.R			

2. 海外登山の実践と今後の課題

ナムチャバルワ降行動表(2)

		3520m BC	4350m C1	4800m C2	5600m C3	6200m C4	6900m C5	6700m C6
21	10/18 大田隊員 C2へ入る			T.K S.H C.P.R				
22	19	S.T S.P			K.Y.H T.L.R			
23	20	K.Y.H S.T T.L.R S.P						
24	21	S.P 60						
25	22	S.P 60						
26	23	S.P 60						
27	24	T.K S.P 60						
28	25	S.H 60			T.K.Y			
29	26 大田隊員 飯野儀		T.K					
30	27 登山団会 C2入り				T.K Y.H S.T.P.R			
31	28							
32	29 C3入り							
33	30							
34	31				K.Y.H			
35	11/1					K.Y.H S.T		
36	2 C4建設							
37	3						T.Y S.P	
38	4				S.T.L.R T.Y S.K.H S.P			
39	5						T.K.Y T.P.R	
40	6							S.H T.K.Y S.T.L J.P.R

ナムチャバルワ峰行動表(3)

		3520m BC	4350m C1	4810m C2	5600m C3	6200m C4	6990m C5	6700m C6
41	11				S.H. → T.K.Y.			
42	8			J.P.R. ←	S.T.L. → J.P.R.	S.H. →		
43	9			S.H. → J.P.R.				
44	10			S.T.L. → J.P.R.				
45	11			S.H. →				
46	12	1次隊 C2の沈		S.H. → J.P.R.	J.P.R. →			
47	13	2次隊 C2の沈		S.H. →	J.P.R. →	T.K.Y. → J.P.R.		
48	14				S.H. → J.P.R.			
49	15	C5建設				S.H. → T.K.Y.	J.P.R. →	
50	16					S.H. → T.K.Y.	J.P.R. →	
51	17					S.H. → T.K.Y.	J.P.R. →	
52	18					T.K.Y. → J.P.R.	S.H. → J.P.R.	
53	19	C4建設 2350m到達					T.K.Y. → J.P.R.	
54	20	2350m到達			J.P.R. →	S.H. → T.K.Y.	S.C. → P.R.	
55	21					S.H. → T.K.Y.	S.L.S.C. → P.R.	
56	22	2460m到達				S.H. → T.K.Y.	S.C. → J.P.R.	
57	23					S.H. → T.K.Y.	L.S.C. → P.	
58	24	登頂断念				S.H. → T.K.Y.	P.L.S.C.	
59	25	C6, C5 撤収		S.H. → P.L.S.C.	T.K.Y. →			
60	26	C4, C3 撤収		T.K.Y. →				

ローサングワ総隊長
山田二郎総隊長

雪崩事故の状況について

1991年10月17日
C2にて
重廣恒夫

1991年10月16日、標高5,600mのC3より7時10分頃、日本人隊員3名、8時頃中国隊員3名がC4予定地に向けて出発。ルート上は積雪が多く、深いラッセルなので、10時頃から日本人隊員3名、中国人隊員2名の計5名で交代でラッセルを行う。最低コル(5,800m前後)でC1楳田に連絡(但しC1では取れなかった)、その後C4予定地に向けて更にラッセルを行った。

1990年秋の試登の際のC4(6,350m)の下のゆるいプラトー(高見の高度計は6,150mを示していた)に出た。その後、NHK東野、米山と合流、全員がプラトーに集結した。この付近でC4ができないか否か検討、C1よりC2に荷上げ中の重廣に報告した。(この時、重廣はC2の手前におり、13時10分頃か。)

高見は先頭でラッセルしていたので、50m程下った所にある荷物を取りに下った。(この間、大西隊員から重廣へ交信。上部の偵察を行うとの報告。13時15分前後か。)デポ地に戻ったところ、大西隊員が上部へ偵察に行くと出発。そこから昨年のC4の付近は傾斜は40度前後であったが、大西隊員は早いスピードで登り、その後を木本隊員が続いた。

木本隊員はすぐに左にトラバース、高見はプラトーにて食事を摂っていた。その後、高見登攀隊長はトレースを伝い20m程登ったが、デブリの山であり雪崩の発生を知った。雪崩の発生は13時35分前後と思われる。大西隊員の姿は見え、木本隊員がデブリから姿を現した。20m程流されていた。2人で付近を探し、13時50分、大西隊員を発見。デブリの中から右手が出ていた。中国人隊員も一緒になって掘り出した。大西隊員がデブリの雪面下70~80cmの所にあおむけで埋まっており、プラトー(デポ地-6,150m)まで降ろし、人工呼吸を開始した。14時20分頃まで人工呼吸を行ったが、瞳孔も開き、脈もなかった。BCの小島ドクターに状況を報告、死亡を確認した。その後、テントにくるみ5,850mまで降ろし安置、C3に戻った。下りは風で朝のトレースも消え、歩行は困難であった。

◎雪崩の大きさ

深 さ 30~80cm
幅 150~200m
長 さ 80m(最長)、右手は50mだった
標 高 6,250~6,200m付近

◎C2にて

13:10 高見登攀隊長からのプラトー到着の報告
15 大西隊員より上部偵察の報告
40~45 上部で雪崩発生 of 報告
大西隊員が見つからない。
人工呼吸をしている。
BC小島ドクターに指示、人工呼吸その他の確認を行った。
14:15~20 大西隊員の死亡を確認
40 読売新聞島田氏へ東京、ラサ山田総隊長への連絡を依頼
15:15 小島ドクター検死の為、C2へ上がるよう指示
15:25 高見登攀隊長より5,850mに大西隊員を安置したとの報告
その後、桑珠隊長、ローサングワ総隊長と収容計画について協議

2. 海外登山の実践と今後の課題

事 故 対 策

梅里雪山の事故に見られる様に、自然の想像を絶する変化の前には、人の力は無力に近い。

南迦巴瓦峰^{ナムギャバワフ}では、実際的な対策を考えたい。

1. 肺水腫その他の高所障害に関しては、薬物投与、及びC5、C3配備の酸素を用い、早い方法で下方キャンプへ移送する。
2. 雪崩事故に対しては、行動中ブローチ型発信機を行動隊員が携行し、発生時に受信機（携行無線機）にて電波を検出、救出活動を行う。
(53MHZの方が探知能力が高いとの事で、144MHZの使用変更)
3. 小規模事故の発生に対しては、隊の中で処理を行う。その為に、登山隊自体は、なるべく小人数で、分散型のタクティクスを採用し、フォロー態勢をとる必要がある。
4. 大事故の発生に対しては、インマルサットを利用した電話、FAXで、東京、北京、ラサとの連絡をとり救援態勢を整える。

事故が発生した場合、一般的に考えられる航空機の使用は、その航空機がレスキュー仕様であると同時にレスキューに習熟している隊員の同乗活動がなければ、その効果は皆無で役にたたないので、今回の場合は、隊内処理、或いは近隣施設からの支援を得ての救助活動が主となると考える。

今回の使用で感じたこと

今回用意したアルキテックのテレマウス^㊸（発信機）テレメハンディアンテナ（CM-6H）、その他の付属品は使用する機会がなかった。本来雪崩事故対応のために持参したものであるが、受信機、アンテナ、その他付属品の使用の前に、雪崩に埋没した大西隊員を15分という短時間で発見し、掘り出すことができたからである。

テレマウス^㊸は長時間わたって搜索を要する雪崩事故では有効であるが、今回のような狭い範囲と浅い場所での埋没の搜索は、隊員全員が携行している無線機（今回の場合は144MHZ）のほうが探知能力では劣るが、早期発見には役立つのではないだろうか。

頂上アタック

深い雪と強風に悩まされながらも予定の隊荷をC5に荷上げする事ができた11月19日第1次アタック隊は上部の風が止むのを待って、6700mの最低コルに第6キャンプを建設、さらに頂上直下の雪壁を7230mまでルート工作した。20日、C6を出発した第1次登頂隊は頂上を目指して出発した。頂上直下の60度近い斜度の雪壁は昨日のフィックスによって上部から支尾根となって伸びている岩稜の基部にいたり、岩稜の右側に出たが雪質が変わり、今にも雪崩そうな悪い積雪状態にルート工作は行き詰った。朝から小雪が舞う天気であり、C5からもアタック隊の行動をかいま見る事はできなかったが、高見登攀隊員の「7350m付近を登っているが雪が降っている。ガスが濃く視界が悪い」それに続く「小さな雪崩が足元から起きる」との報告を受けては行動を続行する事はできない。雪崩は降雪によるものではないが、岩稜の側面、そして垂直の岩壁帯の直下という囲まれた地形が上部からの風成雪もあって流雪が起きていると思われた。7350mの地点に登攀具をデポ本日の行動を終了した。

21日は天気も思わしくなく、連日の行動でアタック隊も疲れているのでC6にて休養、C5から食糧、燃料の補給を行った。

22日、午前4時20分、第6キャンプを出発した日中各3人の第1次アタック隊は風も予想より弱く、満月がこうこうと照る中勇躍頂上へと向って出発した。先日のアタックで到達したロックバンド基部より高見登攀隊長トップで右ヘトラバース。今日は天気も良く、C5からもアタック隊の行動がビデオの超望遠レンズを通して手に取るように解った。しかしロックバンドの不安定な雪にアイゼンもスリップしがちで時間だけが経過していった。

そのうちにレンズを通して、登高中の隊員の周辺を雪が風で舞うのが見えた。ツエリンドルジェ隊員がトップにたつた頃から稜線に雪が走るようになり、ロックバンドも荒れ狂う風雪に見え隠れするようになり、午後零時40分アタック隊を雪崩が襲った。

それぞれがピッケルを雪面に打ち込み、フィックスにぶら下がりながら流される事だけは防いだが、ゴーグルやサングラスを何人かが飛ばされた。岩壁帯のいたる所から滝の様に雪が流れ、一方強風が雪を吹き上げた。午後1時過ぎ撤退を決定した。ほとんどの隊員が手足に軽い凍傷を負いC6に帰った。7460mが最高到達点であった。

23日、足指の凍傷でツエリンドルジェ隊員とロズ隊員がC5の羅申隊員とシャオチミ隊員と交代し、ベースキャンプへ下がった。食糧等の補給も行ったが、24日、登山の終結が総指揮部により決定された。登山隊員のみならずベースキャンプでの待つ人達にとっても長い60日間であったのだろう。

2. 海外登山の実践と今後の課題

1991年のチベット・南迦巴瓦峰の天候について

1991年12月3日
西藏自治区気象局
副局長 索 郎 多 吉
技 師 朱 宝 維

1. 概 略

ナムチャバルワはブラマプトラ河を遡る湿った空気に影響され、南の雨季の開始が早い。チョモラソマでは、5月下旬にモンスーンが始まるが、ナムチャバルワでも通常5月初旬に始まり、秋は通常10月上旬に雨季が明けるが、早いときには4月初旬に始まり、10月下旬まで及ぶことがある。

ナムチャバルワに登ろうとすれば、降水の状況から考えれば、秋の時期を選ぶのがベターだが、雨季が終わると風が強くなる。春から夏にかけて、チベット高原の北側で強烈な風が吹く。また、10月になると強風帯が北側から南側に移る。それはヤルツァンポーに沿って西南風が多く、10月下旬になると更に風が強くなる。10月から11月にかけて2～4回くらいベンガル湾からのサイクロンの通過があり、今年の秋は11月上旬に1つサイクロンが通りすぎた。サイクロンの通過時は、雲の発生が多く流雪が多発する。

登山に有利な時期は雨季の終わった直後であり、太平洋高気圧が張り出してくる9月下旬（15日以降）に登山を開始し、登頂時を10月上旬から10月中旬に持ってくるのが適当である。8月下旬から9月上旬にかけて好天気が続くことがあるが、この時期はチベットに高気圧が張り出しており、気温が高く登山活動から見ると有利ではない。ナムチャバルワは5月になると南側にある強風帯が北側に位置し、この時期から雨季が始まり多くの雪が降り、春の時期には登頂のチャンスが非常に少ない。

なお、ナムチャバルワ峰周辺の気象は、ラサ気象局の他、林芝（気象台）、米林（測候所）、ポミ（測候所）、ツアイ（測候所）、ジャツア（測候所）で行われ、ラサ気象局、林芝気象台は予報も出せる。

2. 1991年度の状況

6月4日にモンスーンが始まったが、降水量はそれほど多くなく平年と変わらないが、風が非常に強い年であった。

今年のナムチャバルワ地域については、知る限り正常な気象であった。ベンガル湾からのサイクロンが2回あったが、通常の年に比べると少ない回数である。北から南への強風帯の移動は10月下旬であり、11月中旬から風が非常に強くなった。登山ルートが風が当る所となるので、このような風の状況から見ると、ナムチャバルワで登山するのは9月下旬から10月下旬が良いと思われる。

3. まとめ

ナムチャバルワの天候は変わりやすいので、悪いときにはキャンプで待機し、良くなれば最短距離から出発すべきである。なぜなら、天気のサイクルが短く、3日～4日好天が続けば長いほうである。したがって、C2もしくはC3で待機をし、好天を予測しての数日に渡るアタック態勢では頂上に到達することは難しいと思われ、少なくともC5以上で待機すべきである。

2. 海外登山の実践と今後の課題

まとめ

今年、日本山岳会はナムチャバルワ峰の再アタックを行う。ルートに関しては北面、西面から頂上に迫る事も考えられるが、地理的な制限もあって実現は難しいと思われる。

最低コルから頂上への左の岩稜は風も強いであろうし、時間がかかり過ぎる難点がある。南壁部分の流雪も降雪直後及び強風下以外ではそんなに規模は大きくないと思われる。ナムチャバルワ峰の天気は周期性もはっきりしないし、強風、降雪をくり返しているの、悪い時にはキャンプで待機し、良くなれば最短距離から出発すべきであろう。なぜなら天気の変化のサイクルが短く、3・4日好天が続く事はまれで、したがってC2もしくはC3で待機をし、好天を予測しての数日かかるアタックの方法では頂上に到達する事は難しいと思われ、C6への補給を確保し充分の蓄積をし、ロックバンドを突破してからは、一気に頂上アタックをすることが登頂の確率を高めるものと思われる。

(日本山岳会員)